The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	現代日本語における副詞の意味と機能ー〈感動詞的用法〉の派生を中心にー
Author(s)	全, 紫蓮
Citation	大阪大学, 2015, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/51853
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　全　紫　蓮　）	
論文題名	現代日本語における副詞の意味と機能 ―＜感動詞的用法＞の派生を中心に―

論文内容の要旨

本論文の目的は、多義的な意味・機能を持つ現代日本語の副詞「もう」「まったく」「ちょっと」を対象に、どのような感動詞的な用法が派生しているのかを実例に基づいて記述し、感動詞的に用いられる場合における「もう」「まったく」「ちょっと」の相互比較を行うことにより、これらの間に見られる共通点と相違点を探ることである。

従来の研究において既に指摘されているように、副詞と感動詞は近い関係にあり、本論文で取り上げる「もう」「まったく」「ちょっと」は、(1)(3)(5)のように、時間、完全否定、程度・量に関わる副詞として用いられる一方、(2)(4)のように、話し手の評価感情表出としても、(6)のように、聞き手への注意喚起としても用いられる。

(1)彼はもう韓国に帰国した。
(2)もう、惚けないでくださいよ。
(3)あいつったら英語がまったく分からないんだよ。
(4)まったく、どうにかしてよ。
(5)今日は昨日よりちょっと涼しいです。
(6)ちょっと、そんなことしたら子供が真似するでしょう。

「もう」「まったく」「ちょっと」に(1)(3)(5)と(2)(4)(6)のような用法があることは先行研究において既に明らかになっているが、(2)(4)(6)のように用いられると、その意味・機能が類似してくる場合があることの記述はまだ行われていないと思われる。実際、(2)(4)(6)の「もう」「まったく」「ちょっと」は、次の(2')(4')(6')のように、相互に言い換えることができる。

(2')｛もう／まったく／ちょっと｝、惚けないでくださいよ。
(4')｛もう／まったく／ちょっと｝、どうにかしてよ。
(6')｛もう／まったく／ちょっと｝、そんなことしたら子供が真似するでしょう。

以下、(2')(4')(6')のような相互言い換えが可能になることについて、本論文で述べた「もう」「まったく」「ちょっと」の意味・機能と、＜感動詞的用法＞に見られる共通点と相違点をまとめる。

「もう」の意味・機能

①「もう」は、時間的意味を表す＜副詞用法＞が基本となる。

② 文体差を問わないとすれば、(1)は、(1')のように、事態の実現後を表す点で「もう」と類義関係にある「既に」に言い換えられる。しかし、話し手の評価感情が前面化された(1")では、「既に」の使用が不適切になる。「既に」とは違って、話し手の評価感情が前面化された、くだけた会話文に使用されやすい「もう」の方から、(2)のような＜感動詞的用法＞が派生している。

(1') 彼は｛もう／既に｝韓国に帰国した。
(1") あれ、｛もう／？既に｝戻ってきたの？

③ 収集した明治期と現代の用例を比較してみると、現代になって「もう」の＜感動詞的用法＞の使用が増加していると考えられる。

「まったく」の意味・機能

①「まったく」は、完全否定を表す＜副詞用法＞が基本となる。

② (3)は、(3')のように、完全否定を表す点で「まったく」と類義関係にある「全然」に言い換えられる。しかし、(3")のように、「まったく」が文頭にくると、話し手の評価感情が前面化され、「全然」の使用は不適切になる。また、(7)のように、特に肯定述語との共起において、「全然」に比べ使用範囲が広い「まったく」の方からのみ、(4)のような＜感動詞的用法＞が派生している。

(3') あいつったら英語が｛まったく／全然｝分からないんだよ。

(3") ｛まったく／？全然｝あいつったら英語が分からないんだよなあ。

(7) 彼の話には｛まったく／＊全然｝同感です／驚きました。

③ 収集した用例から言えば、「まったく」の＜感動詞的用法＞は、明治期にはその使用が見られない。

「ちょっと」の意味・機能

①「ちょっと」は、程度・量を限定する＜副詞用法＞が基本となる。

② (5)は、(5')のように、程度の低さを表す点で「ちょっと」と類義関係にある「少し」に言い換えられる。「ちょっと」と「少し」は、(8)のように、量の少なさを表す点でも共通している。しかし、(9)(10)のように、話し手の評価感情が前面化された場合は、「少し」の使用は不適切になる。くだけた会話文では使用されにくく、もっぱら程度・量を限定する「少し」からは、(6)のような＜感動詞的用法＞が派生していない。

(5') 今日は昨日より｛ちょっと／少し｝涼しいです。

(8) ワインを｛ちょっと／少し｝飲んだら、気分がよくなりました。

(9) この問題は｛ちょっと／？少し｝難しい。私にはとても無理だ。

(10) ｛ちょっと／？少し｝やめてよ。

③ 収集した用例では、相手に軽く呼びかける＜感動詞的用法＞は、明治期からその使用が確認できる。

＜感動詞的用法＞の相互比較

特徴	もう	まったく	ちょっと
一語文	単独で文となる。	単独で文となる。	単独で文となる。
構文的位置	文頭にも文末にもくる。	文頭にも文末にもくる。	文頭にくる。
発話場面における聞き手の存在	任意的である。	任意的である。 （内的独白でも使用される。）	義務的である。
評価感情	否定的評価感情も肯定的評価感情も表せる。 （ただし、収集した用例を見る限り、「もう」が肯定的評価感情を表す場合において、さそいかけ文とともに用いられる例は見当たらない。）	否定的評価感情しか表せない。	評価感情に中立的な呼びかけの場合が基本だが、否定的評価感情を伴うことがある。 （収集した用例では、「ちょっと」が明らかに肯定的な評価感情を伴う場合は見られない。）
文体	くだけた会話文に限定される。	くだけた会話文に限定されない。	くだけた会話文に限定されない。

①「もう」と「まったく」は、(2)(4) のように、くだけた会話文で用いられ、話し手の否定的評価感情を表す場合、相互に言い換えることができる。しかし、(11)のように、肯定的評価感情を表す場合は、「もう」の使用が適切であり、(12)のように、主語と述語が整った文や丁寧な言い方の場合は、「まったく」の使用が適切である。

(2) もう、惚けないでくださいよ。

(2') まったく、惚けないで下さいよ。

(4) まったく、どうにかしてよ。

(4') もう、どうにかしてよ。

(11) もう、それ見てるだけで感動しちゃうんだから。

(11') ？まったく、それ見てるだけで感動しちゃうんだから。

②「まったく」と「ちょっと」も、(4)(6)のように、聞き手に対する否定的評価感情の表出の場合、相互言い換えができる場合がある。ただし、「もう」と「まったく」の場合とは違って、言い換えると、それぞれの個別的な側面が前面化される。(4')のように、「まったく」を「ちょっと」に言い換えると、聞き手への注意喚起という側面が前面化されるが、(6')のように、「ちょっと」を「まったく」に言い換えると、話し手の評価感情表出の側面が前面化する。しかし、(13)(14)のような場合は、相互に言い換えることができない。(13)のように、聞き手に向けられた評価感情ではなく、話し手自身に対する評価感情表出の場合は、「まったく」の使用が適切である。そして、(14)のように、評価感情に中立的な単なる呼びかけの場合は、「ちょっと」の使用が適切である。

(4)　まったく、どうにかしてよ。
(4')　ちょっと、どうにかしてよ。
(6)　ちょっと、そんなことしたら子供が真似するでしょう。
(6')　まったく、そんなことしたら子供が真似するでしょう。
(13)　まったく自分の適応能力に私ながら呆れる。
(13')　？ちょっと自分の適応能力に私ながら呆れる。

③「もう」と「ちょっと」の場合も、(2)(6)のように、くだけた会話文で用いられ、話し手の否定的評価感情に関わる場面において、相互に言い換えられる場合が見られる。収集した用例を見る限り、「ちょっと」が明らかに肯定的である評価感情を伴う場合は見られず、「もう」との言い換えも否定的評価感情の場合にしかできないと判断される。ただし、この場合も、(2')のように、「もう」を「ちょっと」に言い換えると、注意喚起という側面が前面化されるが、(6')のように、「ちょっと」を「もう」に言い換えると、話し手の評価感情表出の側面が前面化される。また、(15)のように、もっぱら話し手の感情表出で用いられた「もう」や、(14)のように、評価感情に中立的な単なる呼びかけで用いられる「ちょっと」は、互いに言い換えることができない。

(2)　もう、惚けないでくださいよ。
(2')　ちょっと、惚けないでくださいよ。
(6)　ちょっと、そんなことしたら子供が真似するでしょう。
(6')　もう、そんなことしたら子供が真似するでしょう。
(15)　もう、サイッテー！　リストラよー！　目の前まっくらよー！
(15')　？ちょっと、サイッテー！　リストラよー！　目の前まっくらよー！

④「もう」「まったく」「ちょっと」の相互言い換えを総合的に言うと、＜くだけた会話文＞において、＜聞き手に対する＞、話し手の＜否定的評価感情＞と関わる場合、「もう」「まったく」「ちょっと」はいずれも使用可能となり、相互に言い換えることができる。ただし、これらが全く同じ意味・機能で用いられるのではない。「もう」と「まったく」では＜話し手の評価感情表出＞の側面が前面化されるが、「ちょっと」では＜聞き手への注意喚起＞の側面が前面化され、個別的な意味・機能上の特徴を保ちつつ、相互言い換えが可能になるのである。

以上のように、 本論文では、＜感動詞的用法＞における「もう」「まったく」「ちょっと」の相互比較を行った。「もう」「まったく」「ちょっと」が＜感動詞的用法＞を持つことは、従来の研究において既に指摘されていることであるが、本論文では、＜感動詞的用法＞の「もう」「まったく」「ちょっと」の間に、互いに共通している側面があり、相互言い換えが可能になる場合があることを確認することができた。しかし、なぜこのような現象が起こるのかについて、品詞論的観点からの理論的考察を行うことができなかった。そして、使用場面と運用上の特徴に関する語用論的観点からの分析も充分にはできていない。このような文法論的かつ語用論的観点からの理論的考察は、今後の課題としたい。

本論文では、3つの部分に分けて、以上のことを記述していく。第一部の序論（第1章）においては、本研究の目的と先行研究をまとめる。そして、本研究の立場と方法を提示する。第二部の本論（第2章～第5章）においては、記述対象となる「もう」「まったく」「ちょっと」の意味・機能について、類義語「既に」「全然」「少し」との比較を視野に入れ、本来的な＜副詞用法＞を先に、派生的な＜感動詞的用法＞を後に述べていく。そして、明治期と現代との比較を通して、現代に特徴的な「もう」「まったく」「ちょっと」の＜感動詞的用法＞の詳細を記述し、相互比較を行う。第三部の結論（第6章）においては、「もう」「まったく」「ちょっと」の意味・機能と＜感動詞的用法＞における共通点と相違点についてまとめを行い、今後の課題を提示する。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　全　紫蓮　）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	大阪大学　教授	工藤真由美
	副 査	大阪大学　教授	渋谷勝己
	副 査	大阪大学　教授	田野村忠温

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式７別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：　現代日本語における副詞の意味と機能―＜感動詞的用法＞の派生を中心に

学位申請者　全　紫蓮

論文審査担当者

主査　大阪大学教授　工藤真由美

副査　大阪大学教授　渋谷勝己

副査　大阪大学教授　田野村忠温

【論文内容の要旨】

本論文は、副詞「もう」「まったく」「ちょっと」を取り上げ、文学作品から収集した実例に基づいて、明治期と現代（2000 年以降）の両時期における使用実態を調査したものである。現代では、これらの副詞において、一語文としての発話が可能になる感動詞的用法が増加していることを明らかにした上で、この感動詞的用法における「もう」「まったく」「ちょっと」の共通点と相違点を考察している。

第一部（第１章）の序論では、品詞論的に副詞と感動詞が近い関係にあるという観点から先行研究を精査し、従来の研究において手薄であった、副詞としての基本的用法から感動詞的用法が派生していくプロセスを追求することが本論文の目的であると述べる。

本論となる第二部は３章より成り、まず第２章では、類義形式「既に」との比較対照を行いつつ、多義的な副詞「もう」を取り上げる。事態の実現後を表すという時間的意味を表す副詞用法では、文体差を問わないとすれば、類義形式「既に」との言い換えが可能であるが、「既に」とは異なって、発話者の評価感情が前面化された、くだけた会話文で使用されやすい「もう」の方に、感動詞的用法が派生すると述べる。第４章では、類義形式「全然」との比較対照を行いつつ、「全然」に比べ使用範囲が広い「まったく」の方に感動詞的用法が派生していること、この用法は明治期には見られなかったものであることを指摘する。第５章では、程度・量を表す副詞「ちょっと」を取り上げ、類義形式「少し」と比較対照しつつ、発話者の評価感情が前面化されるくだけた会話文で使用される「ちょっと」の方に感動詞的用法が派生すること、明治期では、相手への呼びかけという機能しかなかったが、現代では否定的な評価感情を伴う用法が増加していることを示す。

第三部の結論では、まとめとして、構文論的観点及び語用論的観点から、現代になって増加している感動詞的用法の比較対照を行い、発話者の否定的評価感情を表す点で共通しつつ、発話場面における聞き手の存在の有無、発話者の肯定的評価感情の有無、くだけた会話での使用に限定されるか否かという点では異なっていることを指摘する。今後の課題としては、主として、①品詞論的な観点からの理論的考察、②多様なジャンルからの用例調査、③他言語との比較対照、④分析対象の網羅性が残されていると述べている。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、小説という限られたジャンルに留まってはいるが、また、分析対象とした副詞も限られたものとなってはいるが、実例を丹念に収集し、量的、質的な観点からの共時的分析、ならびに明治期と現代（2000 年以降）の使用実態の比較対照を行った労作である。従来の研究でも、「もう」「まったく」「ちょっと」に感動詞的用法があることは指摘されていたが、個別的な指摘に過ぎなかった。本論文の功績は、本来的用法では全く異なる意味・機能を有する複数の副詞が、現代になって、発話者の否定的評価感情を表す点で共通性をもつ感動詞的用法を発達させている事実を明らかにした点にあると言えよう。分かりやすく整理された論文構成になっているとともに、論述のし方も慎重であり、類義形式との比較を含めて可能な限り体系的に記述しようとした点も評価できる。

惜しむらくは、現象の記述に留まり、なぜそうなっているのかについての理論的説明が十分ではないと思われる。どのような言語においても副詞の体系的記述は難しいものがあるが、品詞の転成論や文法化（主観化）の問題を踏まえた理論的考察を深めていくことが今後の課題であろう。具体的には、①副題に「感動詞的用法の派生」とあるにも関わらず、実際の分析においては用法の分類に留まり、出発点的な意味・機能から段階を踏んで新たな用法が派生していくプロセスを捉えきれていないこと、②用例分析の浅さがあることから、感動詞的用法における共通点についても否定的評価感情といった分析に留まり、出発点的な意味・機能と相関させた否定的評価感情のタイプ化についての具体的分析ができていないことが挙げられる。

本論文は、このような未完成な部分を多く残してはいるが、部分的な用例だけに基づく安易な解釈を許さない興味深い事実を提示し、今後開拓していくべき沃野を提起した点で積極的評価が与えられるものとなっている。分析対象となる副詞の範囲を広げることによって、著者の母語である韓国語との比較対照が行えるようになる可能性を有した論文となっていることから、今後は共時的ならびに通時的観点による韓国語との比較対照に期待したい。

よって、本論文を、博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。